21.10.17. 聖霊降臨節第 22 主日

「 主の御心を悟る心 」

みなさん、おはようございます。先週１週間、連日のように厳しい残暑が続きましたが、お変わりないでしょうか？今週からようやく秋の深まりを感じられるようになり、山々はより一層、秋色になってゆくことと思います。教団のカレンダーでは今日から 23 日(土)まで、信徒伝道週間となりますが、過ごしやすい時季を迎え、日々、心静かに主のみ言葉に耳を傾けるとともに、私たちの周囲の人々に対して主を証しする時でありたいと願います。各々が地道にコツコツと福音の種まきに勤しみ励む時でありたいと思います。

さて、前回よりマルコの福音書８章に入っていますが、本書の中では２度目となる大群衆への給食の場面を見ました。一度目は６章で描かれた 5000 人への給食の場面でありましたが、２度目は女性と子供たちを含めて 4000 人以上ということで、弟子たちが手に入れた７つのパンと、わずかな小魚をお用いになり、感謝と賛美の祈りをささげた上で、民衆たちに配られたのでありました。本福音書の記述によれば、それを食べた人々皆が満腹になり、なおかつ残りのパンくずを拾い集めると、７つのかごに一杯になったと書かれています。本日の箇所は、そのパンの奇跡に関連した内容となりますが、１１節から１３節までは、しるしを求めるファリサイ派の人たちの様子について述べられています。４０００人の給食の出来事の後、主イエスと弟子たち一行が舟に乗って移動されたダルマヌタの地方というのは、ガリラヤ湖西岸に位置するマグダラの地であると思われます。おそらくこの所に登場する「ファリサイ派の人々」というのは、わざわざエルサレムからやって来たファリサイ人たちであると思います。並行箇所であるマタイ伝 16 章の前半部分を見ますと、その場にはファリサイ派の人たち以外に、サドカイ派の人々も一緒だったということが分かります。サドカイ派の人々は死者の復活の信仰など、律法の厳格な遵守を主張するファリサイ派とは思想的に立場の違う対立勢力であり、当時の富裕層や貴族階級で構成されていたと言われます。しかしながら、お互いに立場の異なる両者が、主イエスの言動について聞き捨てならないという点において一致し、両者が協力して主イエスを陥れるために議論を仕掛けにやって来たのでありました。彼らが主イエスの許へと訪れ、第一に要求したのは、「天からのしるし」(11 節)でありました。この「天からのしるし」というのは、「天におられる神様からのしるし」と、言い換えても良いかと思います。それは主イエスが救い主であることを示す、神様から与えられた証拠であることを意味しています。つまり、彼らはこれまで主イエスがガリラヤ地方を中心として行われた数々の奇跡の業を人づてに聞いていたものの、それらの出来事を素直に認めようとはせず、疑わしいとして懐疑的になっていたからでありました。それに対して、マタイの方では、主イエスが空模様の見分け方を例に上げて、このような反論を述べています。「夕方になると、あなたがたは『夕焼けだから晴れる』と言い、朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。」(マタイ伝 16 章３節)と、主イエスは彼らに向かって言われました。現在のように AI(人工知能)や人工衛星による天気予報の解析など、想像も出来なかった約 2000 年前のユダヤ社会において、各自が空模様を見て今日の天気がどうなるのか？判断するというのは、ごく当たり前の生活習慣であったと思います。今から約４０年前の私が小学生の時分でも、しばしば母親から似たような天気予測にまつわる言葉を耳にした記憶があります。それが当たっていたかどうかまでは正確に覚えていませんが、パソコンやスマホなど無かった時代、私たちは先人の知恵や昔からの言い伝えを重んじて、日々の日常生活を送っていたように思います。

主イエスは、その日が晴れであるのか？それとも雨になるのか？といったような天気の予想は、空模様というしるしを見て見分けることが出来るのに、あなたがたは時のしるしを見分けることが出来ないのですか？と彼らに迫りました。そして、「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほか

には、しるしは与えられない。」(マタイ伝 16 章 4 節)と言われました。ヨナのしるしとは、旧約のヨナ書の主人公であるヨナが巨大な魚に呑み込まれて、そこで 3 日 3 晩過ごしたとの故事から、キリストの復活の出来事を象徴的に表していると言えますが、このマルコの方では、「今の時代の者たちは、決してしるしは与えられない。」(12 節)と、主イエスがファリサイ人たちの要求を拒絶していることが分かります。つまり、主イエスは彼らに向かって、ご自身こそ、天からの真のしるしであることを告げられたのでありました。その後、主イエスはその場所に長居すべきではないと思われたのか、再び弟子たちを連れて湖の向こう岸へ行かれました。

続く 14 節以降、湖の東岸へ移動する舟の中での様子と思われますが、この場面における主イエスと弟子たちの対話は、弟子たちがパンの持ち合わせがなかったことに起因しています。弟子たちは大勢の人々への対応で慌てていたのか、余りのパンのことにまで気が回らず、舟の中の食料といえば、一かたまりのパンだけでありました。よって弟子たちは、パンを持参することを忘れたことばかりが気になっていて、主イエスがこの所で語られた言葉の真の意味がつかめず、主イエスと弟子たちの話が噛み合わない様子が描き出されています。主イエスが弟子たちに「ファリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。」(15 節)と戒められた際、彼らの中では、パンを忘れたのが誰の責任であるのかをめぐって議論が始まっていました。この様子をご覧になった主イエスは非常に残念に思われ、「信仰の薄い者たちよ、なぜパンを持っていないことで論じあっているのか。」と言われました。言うまでもなく、主イエスがこの文脈で語られたことは、食料であるパンを舟に積み忘れたということではありませんでした。主イエスがこの所で言われたパン種というのは、ご自身に対して懐疑的あり、偽善的であったファリサイ派や、不道徳を助長するヘロデやヘロデ党の教えを意味していました。ここで言われているパン種というのは、イースト菌がパン生地に浸透し、それを急速にふくらませるように、彼らの教えが目に見えない所で一気に広がり、人々の心に悪い影響を及ぼしていることを象徴する言葉でありました。おそらく主イエスはご自身の命が危険にさらされているというだけでなく、彼らの誤った教えによって、優柔不断な弟子たちにも少なからず影響があることを懸念して、この戒めの言葉を告げられたのだと思います。それなのに弟子たちは、全くその意味を取り違えて解釈し、誰の責任でパンを積み忘れたのか？互いに論じ合っていました。かりに主イエスがここで言われたパン種が、食べるパンを意味していたとしても、弟子たちは目の前におられるお方が、どのようなお方であるのか？すっかり彼らの頭の中から抜け落ちていたのでありました。2 度に渡り大勢の群衆たちに、わずかなパンと小魚によって、人々の空腹を満たされた主イエスが共におられ、その主に全幅の信頼を置いているならば、パンが手元にないことなど、全く心配する必要はありませんでした。弟子たちは師である主イエスの思いや危機感を中々悟ることが出来ないでいましたが、主が大群衆への大いなる奇跡について触れられた後、ようやくの事で、その語られた意味を理解することが出来たのでありました。

現代の私たちも、聖書のみ言葉をざっと一読しても、すぐにそのみ言葉が心に入らず、しばらくしてから、時には数年後に、こういう事だったのかと、後になってから教えられるということが多々あるのではないでしょうか？私たちも本日の場面で見る弟子たちのように、私たちの関心事と神様が求めておられる事との間に大なり小なりズレがあることを思いますが、日々のディボーション(聖書通読と黙想)を通じて、常に主のみ旨に適う道へと軌道修正させられ、正しい道へと方向付けられながら、主のみ跡をひたすら辿る者でありたいと願います。読書の秋を迎え、秋の深まりとともに心静かに神のみ言葉と向き合い、私たちの心を深くみ言葉によって探られ、主の御心がどこにあるのか？日々祈りの中で尋ね求めながら、この時を過ごして参りたいと思います。